東海・東山地方における意志・推量表現の交渉と分化

彦坂佳宣

要旨

当該地方には意志の助動詞にムズ出自のいわゆるズ形式、推量にはそのズから派生したダラ(ー)ズ、そのズ脱のダラ(ー)、また元来が推量からの変化形ラ・ズラなど多彩な形式がある。約五〇〇地点の通信調査データにより、これらに地域差があり、特に東山地方の複数形式に用法差のあること、その史的経緯は中世末以降の中央語である近畿方言が順次伝播し、形式と用法の方言化によりこれが成ったことを考察した。

キーワード：東海・東山地方　意志　推量　分布　用法差

(注) カッコに入れた「起きよう」などはその動詞の活用形の類、カタカナの形―オキヨー、「起きヨウ」などは具体形を指す。

一、東海・東山方言での問題

本稿は東海・東山地方の意志・推量表現をやや詳細に見たものである。先に彦坂（2002）「日本語方言における意志・推量表現の交渉と分化」を出した、その補遺の位置にある。前稿は、『方言文法全国地図』（国立国語研究所編、以下ＧＡＪ）の関連図を対象とした地理学的研究であった。共通語で言うと、意志・推量をともに表すウ（ヨウ）から断定辞を先だてた推量の助動詞ダローが分化し、ウ（ヨウ）は主として意志用法、ダローは推量専用法として表現分担がおきた。ここに意志と推量の「交渉」から「分化」への面がある。この時期は、原口裕（1973）により近世中期以降とされ、彦坂（1991）も同意見である。一方、各地の方言に目をやれば、別の形式や異なる経緯を経た場合も多い。地方語を含めた日本語史を考える立場から、こうした意志と推量の関連を全国的視野で検討したものであった。

本稿ではこの点を、新たに東海・東山地方の通信調査データ約五〇〇地点規模により、既存のＧＡＪの模様と比較しながら検討する。この地域の複数形式の表現差や史的経緯は前稿で十分に検討できなかった。加えて、日本語史上の当該地域の特色にも言及する。

以下、慣例により長野・山梨・静岡の各県をあわせて**ナヤシ地方**と呼ぶ。方言に共通性がある点からの命名である。

二、当該地域の史的特性の概要

前稿でも触れたが、ナヤシ地方は長く中央語であった近畿方言の影響が東部へと及ぶ裾野の地域であり、その北部・東部からは、意志・推量がベー、否定表現は助動詞～ナイなど東部方言的な性格を強める。概して当該地方が中世期以降の近畿方言の強い影響下にある東限の地域と言えると思う。この西部方言が及ぶ東端地域の精査が本稿の目的である。

以下、ＧＡＪの調査と彦坂によるデータを比較する形で、まず意志表現の形式、続いて推量表現の形式を点検し、次にその特色をさぐることとする。

三、意志表現の場合

三の1　ＧＡＪから

この調査は一九七〇年代前半のものである。106図「起きよう」の場合を例に、概要をつかんでおく。図1はＧＡＪの公開データから概略図を私に整理・作成したものである。なお、北海道と沖縄はしばらく省いた。

これによれば、概要として次のような特徴がある。

まず、(1) 最新の形式は図1凡例、Ａ群のウ助動詞によるものである。一段活用の場合はここからヨウが分化し、地図では「起きヨウ」が、近畿中央から西は瀬戸内海付近まで、東は岐阜県・北陸地方まで、また関東地方にまばらに、それが新潟県地方へと連続している。その一段階前のもので、ヨウ分化の直前の形が「起キョ(ー)」で、近畿地方の外郭、中国地方の外周、また北陸地方から一部は新潟県付近にある。両形式は同心円状の分布をなし、中央のヨウが新しい。さらにその前段階の「起キュー」は中国地方山間部と九州北部・東部にある。これは近畿以東にないが、かつての存在が想定され、以上あわせて三重の方言周圏論的分布をなす。史的には中央での「起き+ウ(ム)→起キュー→起キョー→起きヨウ」の変化が、地理的に同心円的な模様を呈して分布していると認められる。

これらウによる諸形式のもう一段階古いものがＢ群類で、(2) 中世京都語でウと並び行われたウズの方言形「起き(ー)ズ(ス)」であり、ナヤシ地方を中心に分布する。土佐にも同類と思われるものがあり、古くは藤原与一 (1959) などに瀬戸内海島嶼・隠岐地方にあった報告がある。江戸語では『浮世風呂』にもウズが反語表現として僅かにある。概して (1) の諸形式より一段

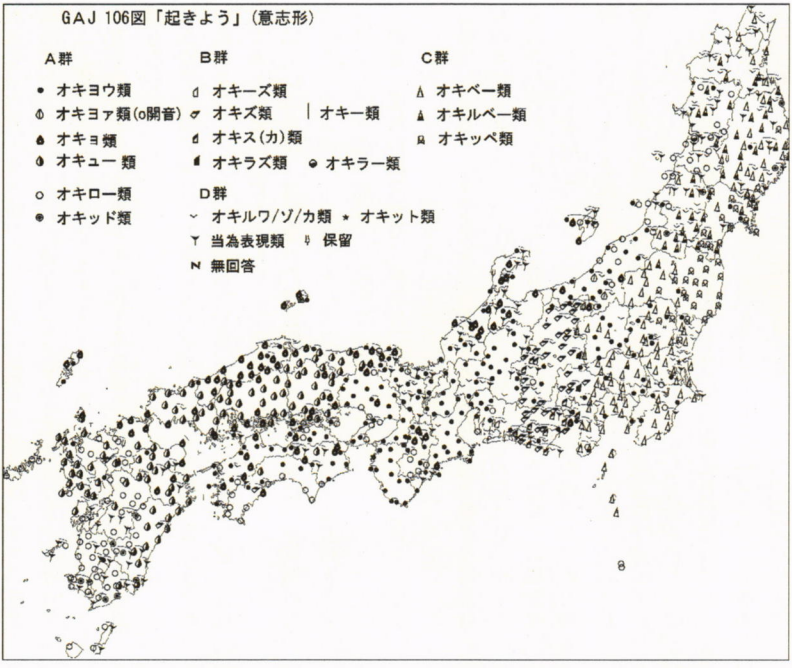


図1　GAJ 106図「起きよう」(独立法人「国語研究所・方言の部屋」による公開データと地図作成プログラムにより、彦坂作成)
＊公開データの形式を類として大幅にまとめてある。凡例の「保留」は判断を保留したもの。

と外側に分布して、その位置からしてウ類より古いことを語る。そして、今は当該地方を除き、新形式に淘汰されている。さらに関東地方以北の太平洋側には東北まで、C群とした(3)ベー類が広くある。東京付近も方言としてはこの形式がなお強い。これは古典語ベシの方言化形である。この他、A群下部に置いた、一(二)段活用のラ行五段化の形である(4)「起きロー」が九州、土佐、紀伊半島・東海地方の一部、新潟県付近にあり、これは国語史にはまず無く、近代以降の方言的地域での新動向であることが分かっている(小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』第4章第4節に詳しく、彦坂の前稿でも述べた)。

以上の史的経緯は、まず右の(3)ベー類(中古期以前)が近畿中央から周辺に伝播し、次に(2)のウズ(中世中期以降、伝播はンズ形)が伝播、(1)がそのあと伝播し、西部日本には速やかに、東部には緩慢に方言化を果たしたのであろう。

問題とする当該地方は、するとベーの東進を追ってウズが伝播し、ベーに阻まれた形で定着したものと考えられる。なお、(1)ウは国語史では古代語の初期からあるが、ここで最新とする点は、ベシ・ウズと比べて一般的な意志・推量を表す点で伝播力

が弱く、ベシ・ウズ類が先に周辺に伝播し、その後、中央語史で結局はウ（ヨウ）だけが残り今日に繋がることになった時点で（1）類の伝播が進んだと考えるためである。なお、中国・九州地方ではなおウからヨウが分化する以前の段階であるが、今は詳述しない。

五段活用類の場合にもふれておけば、GAJ190図「書こう」の地図を見ると、上の（1）はウ形式、（2）（3）はほぼ図1と同じであり、史的経緯も右に準じて考えられる。

以上によれば、当該地方の特色は、やはり中央語の中世期の形式がその東部のベーに東進を阻まれてここに滞留する地域と想定されよう。その詳細はどうなのであろうか。

三の2　彦坂の調査から　調査は二〇〇一、二〇〇七年の通信調査により、〇七年時点で六〇才以上、外住歴七年以下の五〇〇地点相当によるデータである。回収率は質問紙送付総数とその回収数の単純計算で二二パーセント。通信調査の信頼度は低いが、大量調査の利点もあり、欠を補うため複数調査文を比較する用意などもした。なお、この調査では岐阜県飛騨地方の調査は初めから疎らに設定してある。予想語形を提示しそこから選んでもらう場合と、回答形を記入する場合があり、後者では回答数が減っている。図の「・」印は調査地点でありながらそうした無回答の箇所である。詳細を見るためGAJ図と異なる記号にした。

まず、三の1で当該地方の特色と見られた、**「ズ（ス）」の存否を問う概要調査**「ズ（ス）などを使用するか？」の結果を図2で

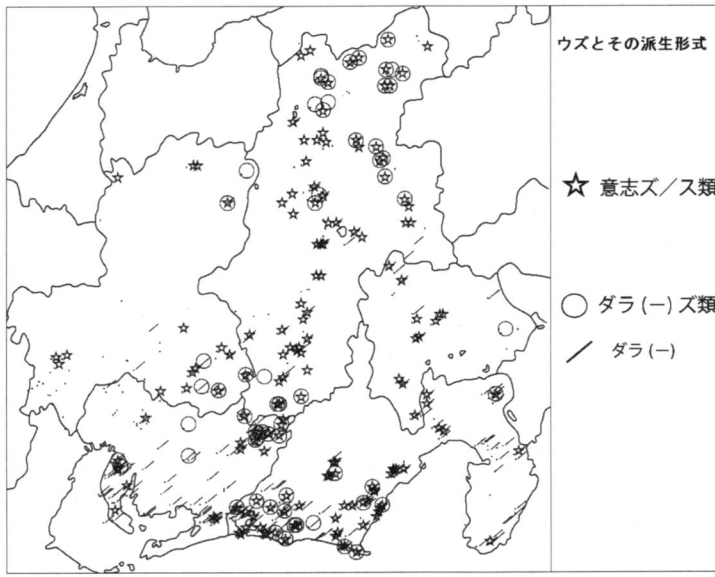
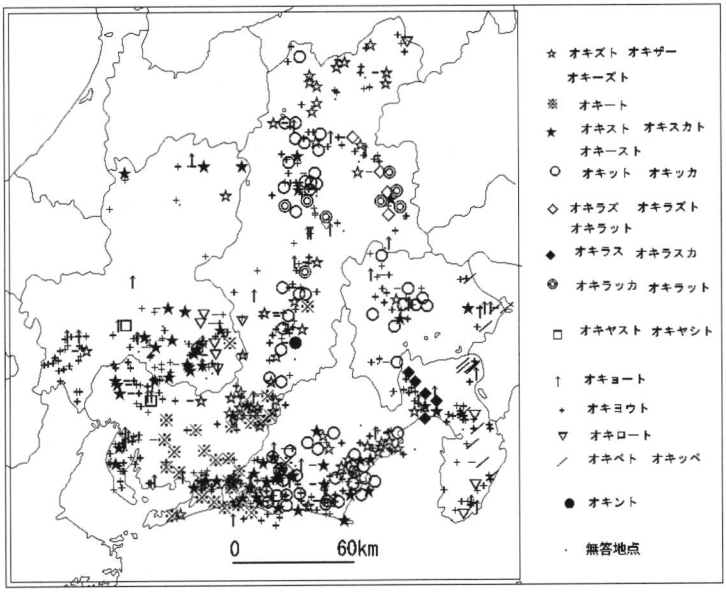


図2　ウズ類とその派生形
（質問「ズ（ス）などを使用するか？」の結果）

図3　「起きようとしたら、まだ早かった」の回答から



見る。☆印のものが「使う」の回答である（他の記号は後述）。

この記号に注目すると、GAJの調査より三〇年以上遅れるが、ズ類の良く似た分布が現れる。また、調査地点の多いことが要因であろう、GAJでは分布がナヤシ地方に主であったものが、図2では西部の飛騨・濃尾地方にも現れ、かつてこの地方にもあったこと、それが衰退気味であることも分かる。

この概要に対し、**具体例文の質問**による、図3「起きようとしたら、まだ早かった」の場合も見よう。ここには詳細な具体形が現れてくる。

やはり☆印のズは図の西部地域に残存し、中部以東の地域ではなお盛んである。また、かなりの地方で★印のようにズ→ス化、また○印のように促音化した地点がある。これは後続形式がカ、トなどの音環境による変異であろう（凡例に～トが無いのは回答のままとしたため）。ナヤシ地方の東部山間地方では別の変化、◇◆印の動詞「起きる」自体のラ行五段化が見られ、オキラズ（ス）・オキラッカなどの形式がある。これらはGAJにも見える。

このズに対し、そのズ脱と考えられる※印のオキー形が三河から遠州、東美濃付近にある。詳しく見ると、周囲はズ、それもズ→ス化形式に囲まれていて、この点で「ズ→音環境によるス化→やがて脱落」の過程が想定できる。図1にもオキーとあるのがそれであるが、この変化が明確となるのは本稿のような詳細な調査に負うところが大きい。

これに対し、共通語「起きヨウ」が西部に色濃く、また他の地域にも見られる。西部地域は近畿からの共通語の影響と考えられ、西からウズ類を塗り替えて進出している。他の地域は共通語の特色である「空からバラ撒くよう」な伝播とされるものであろう。ただ、長野東北部は新潟県のヨウの侵入が考えられる。他に、国語史でヨウの前段とされるオキョーはヨウの付近にあり、これに類するものであるが、多少の方言化傾向と認められよう。と言うのは、当該地域は「行けば」がイキャーとなるなど、付属辞との融合形式が多いのである（彦坂（2007））。

なお、意志形そのものラ行五段化であるオキロー形も東美濃、伊豆半島に散見される。この場合は意志形そのものが優勢なラ行五段動詞のそれに近づいた結果である。図1では九州・土佐・新潟に多く、本稿の地域では知多・木曽付近に計三地点あるが、本図ではさらに広く見える。

まとめ　以上の諸図の比較からは、当該地方のズ（ウズ）がなお活躍していること、そのズ脱形もあり、GAJと共通する点が多い。ただ彦坂のデータからは、ウズの残存地域、ウズのズ脱過程、ラ行五段化傾向など新たに見られる点もあった。

四、推量表現の場合

四の1　GAJから　この場合、当該地方は、ウズ系の形式に加え、ラとズラの用法差が関与して、複雑な模様がある。図4に、GAJの237図「たぶん行くだろう」、図5に同238図「役場に行くのだろう」を並べて示した。提示は紙数の関係もあり、主として当該地方に限った。先行研究では、一般にラは標準語の「だろう」、ズラは「のだろう」相当とされている（例えば『講座・方言学6　中部地方の方言』国書刊行会などの当該地方県の記述など）。この点はどうであろうか。

諸形式の特色　当該地方の形式は、凡例のように四群に分けられる。**第1**は新しく近畿から意志・推量ともに表した「A群」ウが伝播し、これに断定辞を先立てた推量専用形が西からヤロー、ジャロー、そして東部ではダローという並びで進出している。次に古い**第2**が意志・推量の「B群」ウズを基にした形式で「（ウズ）→推量専用形ダラ（ー）ズ→そのズ脱形ダラ（ー）」（断定辞は西部ではヤ・ジャもあり）である。これに**第3**はD群「元来推量群」の古典語「らむ」出自のラと、私見では中世京都語「むずらむ」由来と見るズラである。近畿からの伝播と方言化の時期は、中世国語史の模様からして、概して第2より早いものかと思う。そして関東以北には、ウズに先立って東国へ伝播した**第4**の「C群」ベー類がある。

また、ラとズラは、山梨県では図4のラ対図5のズラの用法差が顕著であるが、長野・静岡県では両形の併用が多く、分布や用法の差は明確でない。さらに、図示しないがGAJ240図「雨だろう」ではナヤシ地方は全域ズラである。これまで両形の違いに関する研究が多かったのはこの複雑な模様を説くためであった。こ

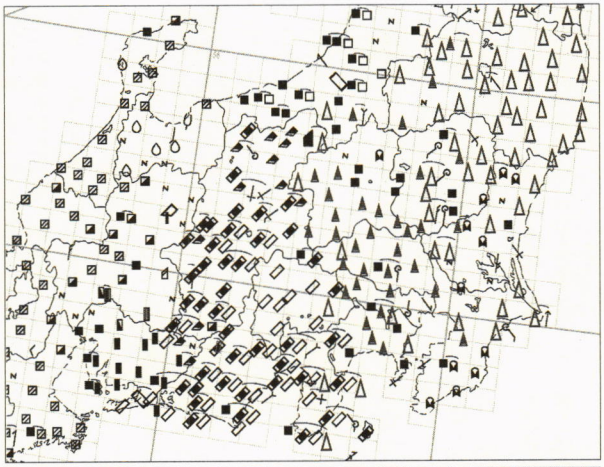


図4　「行くだろう」部分図

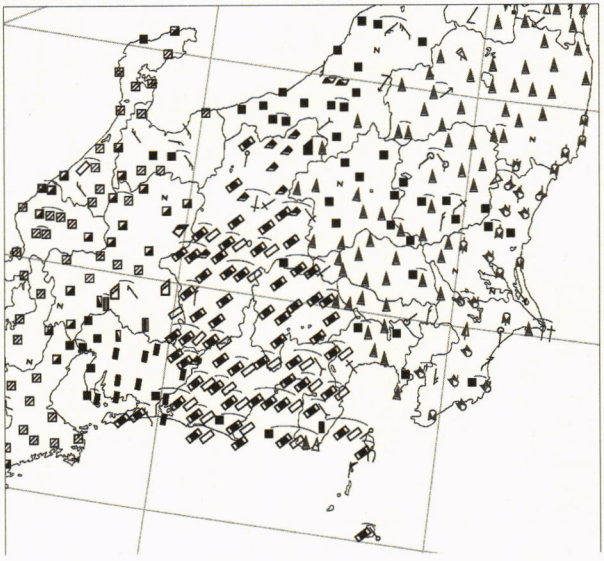


図5　「行くのだろう」部分図

凡例

	A群－ウ	B群－ウズ	C　ベー	D群－元来、推量
意志・推量共用	(行)コー類	(行か)ズ	ベー類	
推量専用形式	ダロー類 ダロアー類＊ ジャロー類 ヤロー類	ダラ(ー)ズ類 ダラー類 ジャラ(ー)ズ類 ジャラー類 ヤラ(ー)ズ類 ヤラー類 ダロアーズ類＊	ダ(ン)ベー類 ダッベ類	ラ類 ロー類 (行く)ロアー類＊ ズラ類

考察に必要な形式のみ凡例に挙げた。
＊印はいわゆる開音形式のもの。

表　図4・5の凡例形式とその整理

うした面を含む、意志と推量の形式の交渉と分化の面はどのようであったのだろうか。

史的経緯　この史的経緯は次のように考える。**第2**のズ（ウズ）は、中世末キリシタン資料の一つロドリゲス『日本大文典』（三省堂、土井忠生訳）に「三河から日本の涯に至る東の地方」の項にンズ、ベーの指摘がある。分布には触れないが、今日から見てベーよりンズが西側にあったことは疑いない。また当時、都（京都）ではムズ→ンズ→ウズの第三段階であるが、当該地方はまだ第二段階のンズ形であった。推量表現は、このンズから断定辞を先だてた推量専用形化をおこし、断定辞はその地域の形式によって西からヤ／ジャ／ダの並びであり、この変化と分布模様に意志と推量の交渉から分化を起こした過程がある。ちなみに、ダラ（ー）ズ、ダラ（ー）はこのンズ（ウズ）の推量専用形であり、先の図2での分布がウズと良く重なっている模様は三者が連続した変化にあることを示している。

推量専用形化の時期は、近世中期頃以降と考えられ（原口裕（1973）、彦坂（1991））、図4・5でのウズ（ンズ）の推量専用形の発達はこれ以後のこと、そのウズのズ脱は近世後期と考えられる（彦坂（1997））。やがてそこに、上記**第1**のウによる推量専用形が近畿から侵入して来た。まずジャロー（上方ではジャアロー）が優勢であるが今は概略）、次に近世末にヤローが伝播した（上方での断定ジャ→ヤは近世末）。すなわち当該地域では、ウズとウがあり、かつその推量専用形化の過程に、時間差のある重層模様があった。これらが登場する以前は、全域が図2・3のウズによる、意志形と同じ「行か（ー）ズ」「起き（ー）ズ」形式であったと考えられる。

第3の類は元来、推量用法であり、中世国語史ではやはり活発に使用され、しかし末期にはやや衰退しつつあった（抄物、キリシタン資料による）。この中世の形式が当地域に伝播し、方言化したのがラとズラと考える。こうして、中央ではこれらは中世末には衰退してジャ・ヤによる推量専用形が普及したのに対し、当該地方はウズとウの推量専用形化に加え、ラ・ズラの受容と方言化が加わり、多くの複数形式を抱え込むことになった。

なお、当該地域の過去の方言資料としては近世後期の尾張のものがある。彦坂（1997）で述べたが、意志・推量のウズは庶民に頻用され、同じくウは遊里に主として使用され、両者に位相差があり、ウズは古くウが新しい関係にある。推量専用形は、断定辞がデャ段階であって庶民はデャラーズ、遊里ではジャラー・ジャローも見られる。他に、ラは幾らか使用されるが頻度は低い、ズラは今のところ見あたらず、しかしナヤシ地方の当時の文献には散見される（残念ながら用法を問うだけの資料の信頼性はない）。するとラ・ズラはやや先に東部地域に伝播したのであろうか。あるいは推量専用形化の趨勢が西部に強く、淘汰されたのか。いずれにしても、以上のような点から、当該地方の諸形式の概括的な出現年代が分かる。

四の2　彦坂調査によるラとズラの表現差　しかし、ラとズラの

関係は複雑である。結論から言えば、両者には表現差があり、そのため共存する形でここに保有されたと考える。ただし、「雨だろう」など、体言を承ける場合はまた別の用法と表現性の模様がある。今回は用言に後接する場合を見る。表現差の点は先行研究が多い。私見では、その表現差は次のような例で分かると考える。

まず、基本的に、（1）目前の事物・出来事を見ての推定的な表現はラ、（2）事物や現象の背後にある理由をさぐる推測はズラで行われると考える。

（1）の例は、図6「あんなに火を焚けば、すぐ煮えるだろう」、図7「そこに置いた、あるだろう」の目視ないし経験的事実にもとづく場合で、岐阜・愛知県東部からナヤシ地方にかけてラが優勢に出るのがその論拠である（回答記入式のため回答数は五〇〇より減っている。図6のラとズラの回答は約130対50、図7は約140対40）。

これに対して、（2）は、背後にある理由などの推量で、図8「あの人は遅くまで寝ている、疲れたのだろう」で、同じ地域がズラ優勢となる（ズラ対ラは約110対20）。図示しないが、背後の理由を問う「なぜ行くのだろう」でも同じである（ズラ対ラは約130対10）。

このような表現差があるために、両形式が共存できたと考える。図6・7等によれば、この表現差を持つのは岐阜県・愛知県の東部からナヤシ地方の中央部以南の地域である。図4・5のG

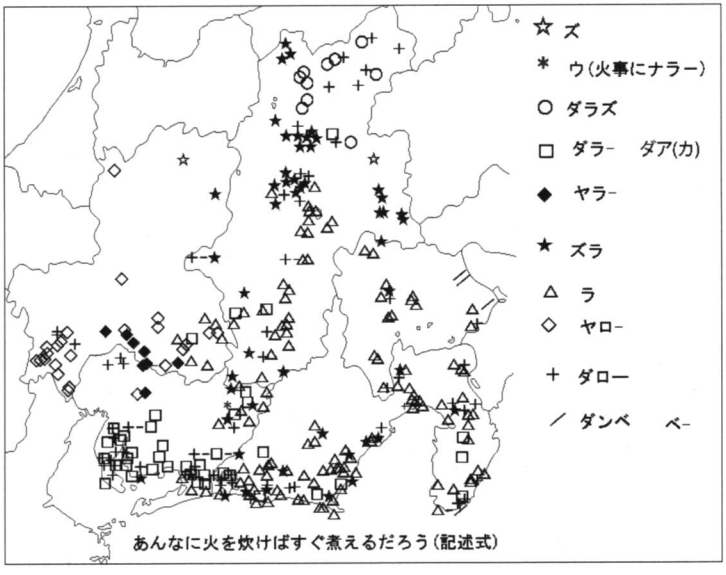


図6「あんなに火を焚けば、すぐ煮えるだろう」

図7「そこに置いた、あるだろ？」

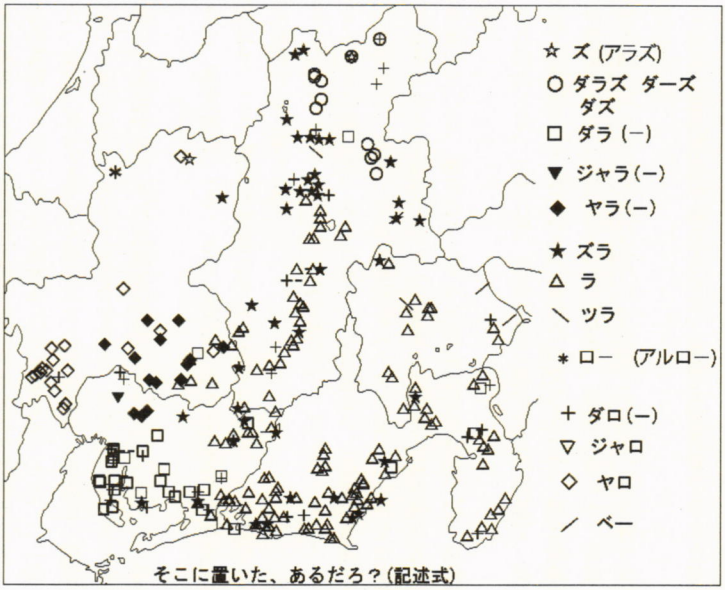
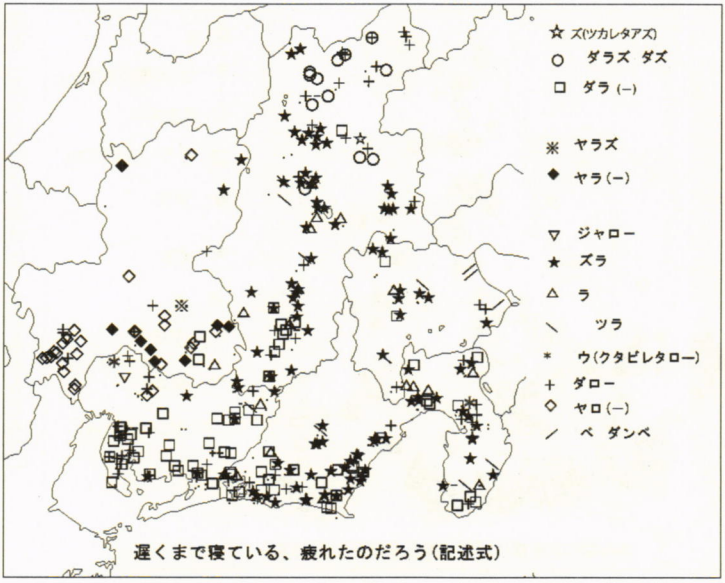


図8「遅くまで寝ている、疲れたのだろう」



ＡＪはこの点の差違が明確でない傾向がある。

その他の地域では推量表現はほぼ一形式に依っている。すなわち濃尾ではウによるヤローかジャロー類、東美濃・三河地方から遠州付近まではウズのズ脱によったジャラーかダラー類がそれぞれの地域で使用され、ナヤシ地方でも北西部はズラ、北東部はダラズのほぼ単独形式である。これを地理的に見ると、当該地方の西部と東北部はウ・ウズによる推量専用形、それに挟まれた地域は本来、推量表現を担当したラとズラの二形式による体系となる。

複数形式の地域は、近畿からの形式がさらに東部のベーに東進を阻まれ、ここに吹き溜まり的に重なった結果と考える。また、この用法差はかなりかつての近畿のそれを保有する形で成ったものと思われる。この点のつめは今後の課題である。

五、まとめ

全体としては、まず、意志・推量ともにンズ（ウズ）がこの地域にあった。次にウが近畿から伝播して、かぶさった。両用法の「交渉」面の時代があったと考える。

推量用法は、この時間差のある二形式が順次、推量専用形化を起こし、複雑な分布が出来た。先行するウズはダラ（ー）ズ、そのズ脱のダラ（ー）を生み、西部では断定辞の変化に合わせてヤ、ジャによる形式も生んだ。これがやがて近畿からのウ類によるジャロー、ヤロー類に押され始めた。なお、東北部のダラズは旧松代藩域との指摘が馬瀬（1992）にあり、この旧藩のまとまりによって今日まで存続したと考えられる。

一方、同じく推量用法は、元来推量であるラム、またムズラムも近畿から伝播し、この地域にラ、またズラ化したと思われて、定着し、ナヤシ地方の中部以南では両者が用法差を保有して併存している。こうした模様が考えられる。

全国視野からの評価　全国的な視野では、このような当該地方の模様はかなり特異な地域となる。まず、今日、ウズとこれを基にしたダラ（ー）ズ・ジャラ（ー）ズは他の地域に無い。西日本に残存する意志ウズの報告はあったが、基本的に西日本では新形式に淘汰され、恐らくウズの推量専用形化はあっても形式・期間ともに僅かではなかったか。それが当地方にはなお方言として広く存続している。次にラ・ズラの二形式の存在がある。「らむ」出自のロー形は九州（ド形化）、土佐、新潟県以北にあるが、当地ではそれがラ形化している。ラは、ロー形式の地方がラム→ラウからオ段長音の開合を経てロー形化したのに対し（島根県のラも詳説は省くがこの組）、当地方はラウからウ脱を起こしたと考えられる。ズラも私見では「むずらむ」からのウズラウ→ズラウ→ズラの線で一応は説ける。ズラの存在、またこれとラとが共存している地域は他にない。

以上の模様は日本語史における当該地方の特徴を語るものと思う。すなわち、当該地方は近畿から比較的近く、しかし不破の関

などもあり交流はさして円滑でない。加えてその東側には異質な東部方言が控えている。近畿からの諸形式がここで東進を阻まれ、しかし消滅せずに堆積した形となったのであろう。

一方、近畿以西の地域は、瀬戸内海の交通があり、新形式の伝播が極めて早く、速やかにウによる意志と推量専用形が伝播し、「らむ」出自形が残るのは周辺地域に過ぎない。ズラに至ってはまず見られない。

以上の説明は憶測を交えた点もあるが、当該地方は、地理的には西部方言から東部方言へと連続する手前の地域であり、史的には中世国語史の影響が強く残り、意志と推量の交渉と分化の過程を含む特異形が複数保有されることが特色と考えられる。

参考文献

小林隆（2004）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
原口裕（1973）「江戸語の推量形」静岡女子大学国文研究六
彦坂佳宣（1991）「近世後期の推量・意志表現」『日本近代語研究』一、ひつじ書房
彦坂佳宣（1997）『尾張近辺を主とする　近世期方言の研究』和泉書院
彦坂佳宣（2002）「日本語方言における意志・推量表現の交渉と分化」『国語論究九・現代の位相研究』明治書院
彦坂佳宣（2007）「仮定条件の全国分布とその特徴」『安達隆一先生古稀記念論集』おうふう
藤原与一（1959）「『隠岐～足摺岬』の線で見た中四国方言」方言研究年報二
馬瀬良雄（1992）『長野県史・方言編』長野県史刊行会

付記

アンケートに協力頂いた各地中学校・教育委員会のご配慮に感謝します。地図作成には「国語研究所」のＧＡＪデータと地図作成システム、および谷謙二氏による地理情報支援システムＭＡＮＤＡＲＡの恩恵をうけた。

（ひこさか・よしのぶ　本学教授）